

2005 年日韓教授統一思想研究会

「現代文化と統一思想」

統一思想と  
インテリジェント・デザイン

渡辺久義

京都大学名誉教授

英文学

千葉県浦安市：一心特別研修院

共 催：統一思想研究院 / P A R P      後 援：世界平和教授アカデミー

2005 年 8 月 27 日—28 日

## 統一思想と「インテリジェント・デザイン」(要旨)

渡辺 久義

統一思想を少数の仲間内で研究しながら理解を深め合うことも重要だが、同時にこれを広く一般の学界に注目させ、その価値に目を開かせるにはどうするかという課題がある。だが、いくつかの理由から、それは今のところ絶望的に難しいと言わなければならない。

しかし追い風がないわけではない。幸いなことに、最近アメリカに台頭し、抵抗を受けながらも、着実に浸透し始めている「インテリジェント・デザイン」(ID)と呼ばれる新しい科学の運動は、少なくとも統一思想と方向性を同じくすることによって、統一思想のために、少しでも道を直くする働きをするであろうことは確かだと思われる。

IDとは簡単に言えば、この宇宙自然界は、方向性をもたぬ自然力(偶然や必然)だけでは説明することができず、そこには自然を超えた知性あるものの「デザイン」が働いていることを、科学として認めようではないかという理論であり運動である。IDの特徴は、この「デザイン」の存在を客観的に実証することであって、それは通常の意味の客観的・実証的な科学である。しかし同時に、「デザイン」といえば目に見えぬ「デザイナー」の存在が当然想定されるから、その意味でIDは、超自然(超越的次元)、形而上学的世界に向かって開かれているという特徴をもっている。

これまで科学といえば、自然主義が当然の前提になっていた。自然主義とは、研究の方法・哲学としての唯物論のことで、自然界は自己充足的なものであって、次元的な外などというものは考える必要もなく、現実にもないと考える。ID運動は、この前提に疑問を持つさまざまな分野の科学者の間から起こってきた科学革命運動である。しかしそれは科学を超えて、文化そのものの体質を変えていく文化大革命としての可能性をもつものである。反対派はIDを、単なる宗教勢力が科学の仮面をかぶって出てきたものと決め付けて、切り捨てようとするが、これは旧来の科学と宗教の対立でなく、科学と科学、すなわち科学のパラダイムの対立であるところに注目しなければならない。

ところで、宇宙自然界の「デザイン」と言えば、まさに統一思想の中心的内容そのものである。ただ、ID理論は「デザイン」の事実を、科学的に検出可能な、(物理学のエネルギーのような)科学概念として位置づけるが、「いかにデザインされたか」にまで立ち入ることはない。それは実証科学としてはできないことである。これに対して統一思想は、宇宙自然界の「デザイン」の仕組みそのものを、「性相」と「形状」の相互作用といった観点から解き明かす。

統一思想はIDが「デザイン」と一言でいってのけ、あえて弁別をしない英語の design の内包概念、すなわち構想、設計、意図、意志、目的、(それに創意工夫という意味からくる創造、創造動機、創造力まで含めるとして)といったものが、無形有形の世界を通じて、いかに働いているかを説明する理論だと言ってよいだろう。

ID理論が完全に自然主義(唯物論)科学に取って代わる、いわゆるパラダイム転換が起こるには、一般の意識構造が変わらなければならないから、かなりの時間を要するだろうと思われる。

しかしこの運動は、現れるべくして現れた歴史的必然と考えられる。もし将来このID理論が、更に自己を発展させて、宇宙自然界創造の十分に満足できる合理的な説明をしようとするなら、それは無形世界と有形世界を貫通する理論として、統一思想の方向に向かわざるを得ないだろうと私は考える。

IDの批判の矛先は、何よりもまずダーウィニズムという典型的な自然主義「科学」に向けられる。これまで学界の公認理論として他からの批判を許さなかったダーウィニズムは、ID理論の攻勢の前に立場を失くしつつあるのが現状である。しかしもともと、生命や生命の歴史を説明するのに、偶然の変異と自然選択だけで十分だとするこのあまりにも安易で浅薄な理論が、これほど長く生き延びたのは奇跡的というべきであり、それは近年の科学的知見の増大とともにますます説得力を失っているのである。

にもかかわらず、ダーウィン進化論者はその教説の正当性を押し通そうとするあまりに、都合の悪い事実は隠蔽し、間違いであることが判明した数々の事実を、長年にわたって教科書に載せ続けているという驚くべき事実が、近年、ID理論家の一人 Jonathan Wells の『*Icons of Evolution* ——進化について我々の教えていることの多くがなぜ間違いなのか?』によって暴露されたのである。

ダーウィニズムは理論が先行する、あるいは理論が絶対であるから、この理論によって分からないことはないはずだと考える。従って、我々にはどうしても解明することのできない起源の問題、「最初の細胞はどのようにして生じたのか」といった問題も、ダーウィニストにとっては分かるはずのこと、いわば予定的に解決済みの問題なのである。これに対してID派は「それは誰にも分からない」と言う。この言い方の先に何があるかは別として、ともかく経験的科学としては「分からない」としか言えないのである。

一つの例として、『進化論から新しい創造論へ——ダーウィニズムの間違いと統一思想からの提言』(1996)にも取り上げられている「カンブリア爆発」と呼ばれる生物史上の驚くべき出来事を取り上げてみよう。「カンブリア爆発」とは、5億3000万年ほど前に、(ダーウィニズムが要求する)そこに至る先行生物の化石なしに、現存する生物のほとんどすべての基本形態(生物分類上の門)が、完成した形で、地質学的に言ってほとんど「一夜にして」出揃ったという特筆すべき出来事をいう。これはごく最近、中国をはじめ世界の各地で、保存状態のよい同じカンブリア紀の地層が見つかって、いよいよ疑うことのできぬ事実となったようである。

この特筆すべき、しかしダーウィン進化論にとっては都合の悪いこの事実を、教科書——そのほとんどが公認ダーウィニズムの支配下にある——は記載しないか、ほんの軽く言及しているだけだと言われている。例えば日本のNHKの教材は「その後、生物は複雑化し、多細胞生物へと進化しています。5億3000何年前ころには、海の中は多様な生物がすむ世界になっていました」と、「カンブリア爆発」(Cambrian Explosion)という定着した呼称を避けるのみならず、あたかもそれまでに漸次進化の長い過程があったかのように説明している。

これによって、我々が昔から教え込まれてきた進化のいわゆる系統樹——1本の樹の幹(共通の先祖である最初の原始生物)が次々に枝分かれして最終的に今日見る生物の多様性が生じたことを表す——が間違いであって、この樹はむしろ逆さまにした方が真実に近いのだと言われる。

分子レベルでの系統発生研究の先駆者であるカール・ウェーゼ（Carl Woese）は、普遍的な共通の先祖が生きた生命体であったという考えは捨てるべきだと言っている。

「共通の先祖は一つの実体ではない。それは過程である。…従って普遍的な系統発生の樹は、根元が現実の生命体の樹ではない。」

また別の分子生物学者ドゥーリトル（W. Ford Doolittle）はこう言っている。

「分子系統発生学者が「真の系統樹」を発見できなかったのは、彼らの方法が不適切だったからでも、間違った遺伝子を選んだからでもなく、生命の歴史が樹の形でうまく表現できないからである。」

ジョナサン・ウェルズは「普遍的な共通先祖が生命体でなかったとしたら、はたしてそれを「先祖」と呼べるのだろうか」と言っている。また彼は、真に驚くべきことは、カンブリア紀の生物が突如として出現したことよりも、出現した生物の多様性、すなわち構想しうるあらゆる基本型（絶滅したものも含めて）が最初に現れたことだと言っている。

こういった科学者たち——ウェルズを除けば、彼らは特にデザイン派というわけではない——の達した結論は、はじめにデザインがあつた、アイデアがあつた、創意工夫があつた、ということではなからうか。

生命の起源を尋ねていけば、そこには無形世界（超自然界）と有形世界（自然界）の接点あるいは融合点といったものを、想定せざるをえないのである。自然は自然主義によっては説明できないということである。

統一思想は「創造の二段階構造」というものを提示して、いかに目に見えない世界が目に見える世界とつながっているかを説明している。ID理論の出現によってひと度自然主義の呪縛を脱した科学は、統一思想の「宇宙的」説明の方向へ向かわざるを得ないものと思われる。しかしそれには、かなりの時間と障害を乗り越えなければならないだろう。

自然界に対する洞察力のすぐれていたゲーテが、すべての植物の親（原型）としての「原植物」（Urpflanze）というものを想定したことはよく知られている。それは具体的にどんなものかと尋ねられたとき彼は、それは形が有るともいえるし無いともいえる、と答えている。これは現在の通念でいう科学ではない。しかし、科学がいずれはそこを目指さなければならないことは確かなのである。